

第二十 飯尾宗祇

歌人西行俳聖芭蕉と並称される宗祇は連歌界における巨人であつて、連歌と言へば宗祇、宗祇と言へば連歌を連想せしめるばかりであるが、その出身は明らかでない。その誕生は後小松天皇の応永二十八年即ち今川了俊の没した翌年である。その生地に関して近江説と紀伊説とがある。翰林胡蘆集所載周麟景除の宗祇庵主肖像賛には江東の地に産したと見え、梅庵古筆伝にも近江の人としてあるが、駿河桃園の定輪寺の弧月和尚の請いによりて延宝二年の冬如松子が筆を立てた種玉庵宗祇伝には姓は三善、氏は飯尾、紀伊国粉河村に生まると記し、周南文集には紀伊の有田郡の人と見え、紀伊名所図絵には有田郡下津名村の人としてその邸地の址まで挙げてある。周麟景除は宗祇と同期の人であるから、その説もまさか誤りを書き伝えることはあるまいと思われるが、如松子が紀伊説を立てたのは定輪寺に何か拠るべき所伝があつたのであろう。今かの寺には宗祇自筆の金剛経などの外多くの遺品はないが、徳川時代の初期にはなお多少のものが伝わっていたようであるから、後に出来たものと言つても拠となしてよろしいのかも知れない。その種姓についても如松子は傀儡子が幼い宗祇を木偶を容れる函中に入れ山名霜台教豊の家長高山民部少輔の宅に送りその養育を託したと明言している。またある書には父は猿楽師にて尾張に旅した時娶つた人の腹に出来たと言ひ、本居宣長の宗祇伝には姓は中臣、父の名は宗光と言ひ、祇は玉津島明神の申し子にして叔父宗砌について学んだとあり、本居内遠の賤者考には伎楽師の子、出自の賤しいのを愧じて日高郡湯川正春の氏を借りたことがあると言ひ、史籍集覧所収の湯川彦右衛門覚書を見るとこれも否むことが出来ない。さればいづれが正説であるか分からない。系譜の明らかでない偉人の伝にはいろいろと作為されることもあるから今は決しがたいが、或いは父母が互いに生国を異にし、紀伊に生まれて近江に住んでいたのではあるまいか。なお後考を俟つこととする。